

英国労働者教育に関する一考察  
——ラスキンカレッジ (労働者のための  
レジデンシャル・カレッジ) の歴史と課題——

田村 佳子

広島大学平和科学研究センター

**A Study on Workers' Education in Britain**  
——A Short History and Prospects of Ruskin College——

Keiko TAMURA

Institute for Peace Science, Hiroshima University

**SUMMARY**

British adult and continuing education has been provided by LEA(Local Educational Authority), WEA(Workers' Educational Association) and UAE(University Adult Education). In other words, the Responsible Bodies such as WEA, UAE departments and so on have offered liberal education programs and courses for adult working classes with the government's fund. And in this regard, British adult and continuing education has been distinguished from that of other countries. But there has been always a severe and delicate contradiction between state intervention and traditional voluntarism.

Such a feature of British adult and continuing education began to be

forcibly changed since the 1980s. The post-Thatcherite DES(Department of Education and Science) has planned to reduce the power of LEA, to cut budget for adult education, and to link adult education more effectively to the needs of the economy. Under these controvercial changes, the British tradition of liberal adult education, especially that of long-term residential colleges is in danger of collapsing.

There are ten residential colleges in the United Kingdom. One of the oldest colleges is Ruskin College, established in 1899.

This paper deals with Ruskin College as a typical residential college, whose aim is to make clear its historical roles and prospects. The first chapter briefly describes Ruskin College's history. The second chapter introduces the educational content and the administration of Ruskin College. In the final chapter, the author presents the analysis regarding the historical roles and prospects of Ruskin College.

## はじめに

英国の成人継続教育は、地方教育当局(Local Education Authority, 以下LEAとする)、労働者教育協会(Workers' Educational Association, 以下WEAとする)、そして大学構外教育部の三者の協力の下に提供され、非職業的(non-vocational)なりベラルエデュケーションをその主要な構成要素とするものであった。すなわち、公費による補助に支えられ、WEA、大学構外教育部等の責任団体によって実施されるリベラルエデュケーションが英国成人教育の特徴であり、そこには常に国家の干渉とボランティアズムの伝統との拮抗関係が存在してきた。

しかし、このような英国の成人継続教育の特質に変化が現われてきている。1988年の教育改革法(Educational Reform Act)、1992年の継続高等教育法(The Further and Higher Education Act)<sup>1)</sup>等に見られるように、LEAの弱体化に代る教育科学省(Department of Education and Science, 以下DESとする)の権限の強化、大学・成人教育予算の削減、職業訓練・教育への傾斜等、「成人教育を経済界の要求により効率的に結びつけることが重視」<sup>2)</sup>され始めたのである。こうした状況の中で、英国成人教育の伝統の一部を形成してきたレジデンシャルカレッジの多くが存立の危機に立たされている。

このレジデンシャルカレッジは1年から2年の宿泊型のカレッジで労働者に高等教育を提供してきたものであり、現在、以下の10のカレッジがある。Ruskin College(1899年創立)、Woodbrook College(1903年創立)、Fircroft College(1909年創立)、Co-operative College(1919年創立)、Plater College(1921年創立)、Coleg Harlech(1927年創立)、Newbattle Abbey College(1937年創立)、Urban Theology Unit、Northern College(1978年創立)。

本小論ではレジデンシャルカレッジの典型とも言えるラスキンカレッジを取り上げ、その歴史的役割と課題を明らかにすることにより、英国成人継続教育改革の課題を検討しようとするものである。なお、本小論は1992年度日本社会教育学会での共同研究報告に基づくものであることを付記しておく。<sup>3)</sup>

# 1. ラスキンカレッジ略史

## 1) 設立から第1次世界大戦まで

先に述べたように、1899年オックスフォードに設立されたラスキンカレッジはレジデンシャルカレッジの中で最も古い歴史を持つカレッジである。

「働く人々が社会変化を達成できるよう教育することを目的」<sup>4)</sup>としたラスキンカレッジはいくつかの点でそれまでの英国の労働者教育・成人教育機関とは異なっていた。一つは、長期宿泊型の労働者教育機関であること。ラスキンカレッジの設立時には、受講生はいつでも入学することができ、何週間在学しても良かったが、最長52週間在学することのできる労働者教育機関は他にはなかった。もう一つは労働運動や協同組合と関係を持っていたことである。ラスキンカレッジを設立したのはイギリス滞在中の2人のアメリカ人青年--ウォルター・ワトキンズ・ブルーマン(Walter Watokins Vrooman)とチャールズ・オースティン・ベアード(Charles Austin Beard)--であり、それに協力したのがオックスフォードの研究者たちであるが、労働組合の援助も得ていた。当時の英国には、エンゲルスの指摘する「たぐさんの社会主義」<sup>5)</sup>に対応したさまざまな種類の労働者の学習活動があり、一方では基礎教育を中心とした成人学校運動の急激な復活、大学拡張運動の展開が見られたが、労働組合の協力を得た労働者教育機関は目新しいものであった。また、ラスキンカレッジは高等教育レベルの学習を提供することを目的としていたが、大学で教えられる神学や古典言語などの学習を否定していたことも特徴の一つである。ブルーマンは次のように述べている。「『知識』は知的好奇心の単なる満足のためではなく、人間性の解放のために使われるべきであり、社会的責任を求めるために使われるべきである。」<sup>6)</sup>

設立時ラスキンホールと呼ばれたラスキンカレッジでは、レジデンシャルでの教育の他、通信教育、各地方での拡張コースを持ち、1899・1900年には1800人の通信コースの受講者、1902年には96の拡張コースがあった。

しかし、ラスキンカレッジの財政はほとんどブルーマンの妻の財産に依拠しており、ブルーマンの離婚、ベアードの帰米後、1904年には、カレッジは直ちに財

政難に直面した。また、適切な受講生選考の方法を持たない等の問題も抱えていた。しかし、財政の半分以上が労働組合の寄付によって賄われることになり、受講生もこうした組合から送られるようになった。協同組合や一般の人々からの寄付もあり、ラスキンカレッジにおける労働組合や協同組合の影響力は強くなっていった。

こうした中で、1909年、受講生のストライキが起った。学長であったデニス・ハード(Dennis Hird)の解任に反対してのストライキであったが、それは当時の労働者教育の二つの潮流--プレブスリーグ(Plebs League)とWEA--の対決を反映したものであった。プレブスリーグから生まれた全国労働大学評議会(the National Council of Labour College, 以下NCLCとする)は、WEA及び「ラスキンカレッジの教養主義的、改良主義的態度に批判的であり」<sup>7)</sup>、一方、WEAはプレブスリーグ・NCLCの「教育は階級闘争のプロパガンダであり、まったく教育ではない」<sup>8)</sup>と批判していた。ストライキを支持した受講生の多くがNCLCと同様の考えを持っていた。また受講生にとっては「ラスキンカレッジは誰のものか?」という点も重要な問題であった。このストライキは成功せず、ラスキンカレッジを出た受講生は新たな労働大学を作ることとなったが、ラスキンカレッジにもいくつかの変化をもたらすこととなった。カレッジの運営が(Governing Councilの構成員が)、オックスフォード大学の教員とカレッジへの寄付者から、労働者階級の組織の代表の手に委ねられたのである。二点目は、オックスフォード大学の授業に出席し、経済学・政治学(Oxford University Diploma in Economics and Political Science)の学位を取得できるようになったことである。しかしカレッジの授業そのものは大学に従属することなく、労働者受講生の要求に応えた科目を増加した。

## 2) 戦間期

第1次世界大戦、恐慌、ナチズムの台頭、第2次世界大戦と、英国内外の情勢はめまぐるしく動いたが、ラスキンカレッジにとっては「静かな時代」<sup>9)</sup>であった。1914年から1919年まで、休校となったものの、運営の基盤と教育内容は1909年から1914年までに定着していたため、大きな変化は見られなかった。この時期

における最も大きな問題は財政と受講生の減少であるだろう。

第1次世界大戦中・後の労働運動の高揚、そして、労働党内閣の成立の下で、1919年には成人教育委員会(Adult Education Committee)の最終報告(Final Report)が提出され、1924年には成人教育規定(Adult Education Regulation)が公布され、英国の成人教育の原型が形成された。こうして、1919年、ラスキンカレッジは教育省(Board of Education)から補助金(一年につき数百ポンド)を得ることとなった。しかし、恐慌下での公費節約政策、労働組合員数の減少により、ラスキンカレッジを始めとする多くの労働者教育機関は財政的危機におちいった。ラスキンカレッジとNCLCの中央労働カレッジとの合併がTUCによって計画された程であった。が、1930年代には、労働組合、協同組合等から多くの資金を集めることができ、新たな施設を建設することができた。

受講生数の減少も経済的な事情によるものであった。1919年には初めての女性受講者が現われ、1920/21年には72名が寄宿していたが、翌年には60名(内19名が女性)、1922/23年には51名、そして1934/5年には30名に減少した。しかも半数以上が短期の受講者であり、約2割が外国人であった<sup>10)</sup>。これは組合員数の減少による労働組合の収入減によって、労働者が利用できる奨学金が減ったことによるものだった。長期コースの期間も学位を取得できるようになった時から2年間と1年間のどちらかを選択できるようになったが、多くの奨学金の期間が1年間であったため、1年間のコースをとる受講生が多かった。

この時期、オックスフォード大学との関係は次第に密接になった。<sup>11)</sup>大学のスタッフがラスキンカレッジの執行委員会に加わり、出張講義を行った。カレッジの受講生は大学の講義に出席し、学位(the Diplomain Economics and Political Science と the Diploma in Social Training)を取得することができた。また、大学の奨学金を利用することもでき、学部学生のクラブやユニオンに出入りすることもできた。オックスフォードの学生にとっては労働者である受講生が興味深い対象であったが、ラスキンカレッジの受講生の中には「象牙の塔」である大学への反発も大きく、学生との交流は活発ではなかった。また、大学での学位の取得を拒否する受講生もいたが、ラスキンカレッジ自体の中でのトラブルは殆どなかった。20年代、30年代には、ラスキンカレッジの受講生やスタッフは、TUCや労

働党を通じてオックスフォード地域の労働争議を支援し、カレッジと地域との関わりも深まった。

### 3) 第2次世界大戦後

第2次世界大戦勃発後の1940年、通信教育コースを除き休校となったが、1941年から陸軍省が兵士の通信教育コースの利用を援助し始めたため、1944/5年度には7266名<sup>12)</sup>がコースに登録するほど拡大し、終戦までにラスキンカレッジが負っていたすべての借金が返済された。そして、カレッジの再開は1945年9月に30名の受講生で始った。英国政府は戦後復興の課題を抱えてはいたが、「教育省はレジデンシャルの成人教育の必要性とカレッジの援助のためのL E Aの強化を認め」<sup>13)</sup>ており、1960年代初頭まで、ラスキンカレッジの収入の40%<sup>14)</sup>は政府の補助金によるものであった。さらに、1950年以降、主にT U Cから奨学金や寄付が提供され、1963年の「高等教育についてのロビンズ委員会報告(the Report of the Robbins Committee on Higher Education)」以後は、L E Aから受講生に授業料・寮費等を完全に満たす奨学金が支払われた。こうして戦後のおよそ20年間、潤沢とは言えないが安定した経済状態と社会的状況の中で、ラスキンカレッジは今日のカレッジの施設をすべて整えていった。

1960年代後半から、ラスキンカレッジは大きく変化することになった。世界的な学生運動の波の中、受講生はカレッジの運営への参加を求めた。その結果、あらゆる段階での受講生とスタッフとの合同委員会、管理運営委員会への受講生代表の参加が認められた。また教育内容も多様化した。1967年にはラスキンカレッジ独自の労働学の学位コース(Diploma course in Labour Studies)が初めて設けられた。その後、いくつかの学位コースができ、1974年には受講生とスタッフとの話し合いにより、ソーシャル・スタディの学位コース(Diploma in Social Studies)も設置された。保健社会保障省(the Department of Health and Social Security)の援助によってソーシャルワークの資格を得ることができるコース(Applied Social Studies, 以下A S Sとする)も始り、現在のラスキンカレッジの事業の主要なものとなっている。受講生による調査・研究、歴史研究にもこの頃から重点が置かれ始めた。そして、1970年には労働組合研究ユニット(Trade Union Research

Unit), 1976年には労働組合同際研究グループ(Trade Union International Research and Education Group)が設置され、今日のラスキンカレッジが形成されたのである。

## 2, ラスキカレッジの教育・学習事業

### 1) ラスキカレッジにおける主要教育・学習事業

現在のラスキンカレッジの主要な教育事業は2年間のフルタイムのコースである。受講生はラスキンカレッジの6つの学位コースとオックスフォード大学の2つの学位コースの中から一つを選択することとされている。<sup>15)</sup>それぞれのコースは以下の通りである。

(ラスキンカレッジ)

- ・ Social Studies
- ・ History
- ・ Development Studies
- ・ Labour Studies
- ・ Literature
- ・ Applied Social Studies

(オックスフォード大学)

- ・ Special Diploma in Social Studies
- ・ Special Diploma in Social Administration

それぞれのコースはチュートリアルとセミナーを中心に進められるが、他のコースや大学の講義の聴講、コンピュータの学習等も必要に応じて求められ、履修できるようにしている。

これらの二年間のコースの他に以下の様な事業が、例えば1989/90年度には行われている。<sup>16)</sup>

- ・ Advanced Course in Trade Union Studies--労働組合のフルタイムの書記、活動家等を対象とした四週間のコース。労働組合論、労使交渉の技術、時事問題等が学習される。



- ・Certificated in Industrial Studies--バーミンガムのホール・グリーン・カレッジ労働組合学部及びTUCとの協同事業。一年間のコース。
- ・The Certificate in Multi-Disciplinary Studies of Drug Misuse--オックスフォード地区保健局からの依頼事業。半年間のコース、フルタイムで31日間。
- ・Community Education, Research and Training
- ・History Workshop--1960年代から始ったもの。年数回フォーラムを持ち、*History Workshop Journal* を発行している。また、約500の国内外の地方史研究グループを組織している。
- ・The Ruskin Learning Project--100人以上の地域成人が参加。社会科学、A S S、文学、コンピュータなどの科目別に組織された半年間のコース。ラスキンカレッジのディプロマコースや他の継続教育機関への準備コースでもある。ラスキンカレッジの受講生も参加、講義をすることができる。
- ・Nuffield Foundation Travelling Fellowships--ナッフィールド財団、ブリティッシュ・カウンシル、ILOなどの外国人研究員を対象とした、成人教育・研究方法についてのサマーセミナー。

1989/90年度（1989年8月1日～1990年7月31日）の学位コースの受講生数は図表1の通りである。

図表1：ラスキンカレッジ受講生数（1989/90年度）

	Men		Womea		Total
	Residant	External	Resident	External	
1st year	44	6	11	10	71
2nd year	38	7	8	9	62
ASS 1st year	5	2	5	8	20
ASS 2nd year	6	2	7	6	21
Total					174

(Ruskin College, Report and Accounts for the Year Ended 31 July 1990, p.7.)

これらの受講生の入学選考は、①1000語から2000語の小論文と②入学希望の理由や、職業経験、生い立ちなどについての手紙と面接によって行われる。ラスキンカレッジは「最小限の義務教育経験しか持たず教育的に不利益を被っている人々

に機会を提供することを目的としている」ため<sup>17)</sup>、OレベルまたはAレベルの資格<sup>18)</sup>を持つ人々は面接の際、大学やポリテクニクスに進学することを勧められる。また、まったく成人教育の経験を持たない人々も、学習に対する熱意が不足しているとみなされがちである。その結果、平均的なラスキンカレッジの受講生像は、年齢33歳、夜間学校、週末学校等の経験を持ち、労働組合やボランティア活動、市民運動などに関わってきた人ということになる。

こうして入学してきた受講生は、各学期（年3期）毎に定められたチューターにつき、毎週レポートや読書やセミナーでの議論の指導を受け、休暇毎に小論文を課され、最終学期には学位の取得をめざし、1万語から2万語の論文を書くこととなる。

## 2) A S S コース卒業後の受講生

卒業後、入学前の職場に戻る受講生は多くない。このことはラスキンカレッジが設立した時からしばしば問題とされてきた。現在、卒業生の半数以上が大学に進学する。このため、ラスキンカレッジは労働者教育の機関ではなく大学の準備教育機関になってしまったと批判されることもある。しかし、長期にわたる調査の結果では、受講生の多くが、労働組合の書記、成人教育・労働者教育機関の講師、ソーシャルワーカー、議員、公務員などになっており、「労働運動、地域活動において役立つ労働者を養成する」というラスキンカレッジの目標は達成されていると述べることができるだろう。

ここでは、A S S のコースを修了した受講生の卒業後の動向について、リチャード・ブライアントとミッシェル・ノーブルの *Reflections on Social Work Education - A Survey of Former Ruskin Students 1979-1984* (Ruskin College, 1988) に基づいて、紹介する。A S S は先に述べたように1960年代から設置され、1974年から2年の学位コースとなったものであり、他の学位コースとは異なり、学位取得と共にソーシャルワークの職業資格を得ることができるものである。この点で、ラスキンカレッジの受講生全体の卒業後の状況を示すものではないが、受講生の4分の1を占めるコースであり、カレッジの特徴の一つを示すことができるかもしれない。

調査対象者数と有効回答数は図表2の通りである。この内、約70%が地方当局のソーシャルサービス部に働いており、約15%が民間のソーシャルワークの仕事に就いている。民間に就職している者のほとんどが女性である。卒業後半年以内にソーシャルワークの仕事に就いた者が多く、80年代の福祉予算削減の影響がここでは見られない。就職の際の問題として、多くが実践の不足をあげており、また3名が人種差別、性差別をあげている。

図表2：アンケート回収率

Year	No. in	
	Sample	Returns
1979	15	12 (80%)
1980	16	10 (62%)
1981	13	10 (77%)
1982	19	11 (58%)
1983	20	15 (75%)
1984	20	14 (70%)
TOTAL	103	72 (69%)

(Richard Bryant and Michael Noble, *Reflections on Social Work Education - A Survey of Former Ruskin Students 1979-1984*. Ruskin College, 1988, p. 8.)

ラスキンカレッジ卒業後の継続教育については、14名(19%)の回答者がその経験をもっている。その内2名はフルタイムで学位を取得した後ソーシャルワークの仕事に戻っている。また残りはパートタイムでオープンユニバーシティや大学の修士課程、学部在籍している。<sup>20)</sup>

### 3) ラスキカレッジの財政・運営

図表3は、1989/90年度の収支報告である。赤字額は39,889ポンドであり、これは3年連続の赤字である。この赤字はDESの補正予算によってうめられてきた。ラスキンカレッジの収入の半分以上はDESの補助金によっており、次に受講料が大きな収入源となっている。受講料は英国人受講生は年間722ポンド、外国人受講生は年間2490ポンドであるが、これには授業料、寮費、食費等すべてが含まれている。受講生の多くは受講料を全額満たす奨学金を得ている。1989/90年度の受講生の場合、107名がDESの奨学金を得ている。またASSコースの受講生の3/4はLEAの補助金によってラスキンカレッジに来ている。他の受講生もスコット

ランド政府や地方自治体、労働組合の奨学金を受けている。<sup>21)</sup> このように、ラスキンカレッジはDESの補助金がなくては存在できない状況にある。

一方、カレッジの運営に関わっているのは労働組合である。約70名の理事や約20名の執行委員の多くがTUC系の労働組合の代表であり、これにWEAや協同組合の代表、ラスキンカレッジのスタッフや受講生、研究者が加わっている。先に述べたように、受講生は理事会・執行委員会に代表権を持っている。

図表3：ラスキンカレッジ収支報告（1989/90年度）

	Notes	1990 £	1989 £
<b>Income</b>			
Student's fees	1	457,939	458,349
<b>Grants</b>			
DES recurrent grant		761,397	682,088
Grant from the Department of Health and Welsh Office		<u>177,000</u>	<u>139,400</u>
		<u>938,397</u>	<u>821,488</u>
<b>Other Income</b>			
Donations	2	1,950	3,785
Administration nad teaching charges for research services	3	21,791	25,122
Income from investments(Appendix B)		2,142	4,288
Bank interest		2,089	726
Rents received		12,554	9,939
		<u>1,436,862</u>	<u>1,323,697</u>
<b>Expenditure(Appendix A)</b>			
Tutorial		689,575	627,623
Accommodation and household Administration		480,390	444,589
		<u>286,511</u>	<u>279,337</u>
		<u>(1,456,476)</u>	<u>(1,351,549)</u>
Deficit of income over expenditure		(19,614)	(27,852)
Extraordinary item	19	<u>(20,275)</u>	<u>—</u>
Deficit of income over expenditure after Extraordinary item		<u>(39,889)</u>	<u>(27,852)</u>
<b>Movement on Revenue Reserve</b>			
Revenue reserve brought forward		(70,665)	(78,592)
Supplementary DES grant for 1987/88		—	5,779
Deficit for the year		(39,889)	(27,852)
Transfer form building development fund	19	—	30,000
Revenue reserve deficit carried forward		<u>(110,554)</u>	<u>(70,665)</u>

The notes referred to above form part of these financial statements

(Ruskin College, Report and accounts for the Year Ended 31 July 1990, p.19.)

### 3. 労働組合国際研究グループとラスキンカレッジの意義と役割

#### 1) 労働組合国際研究グループ

ラスキンカレッジはその発足時から今日に至るまで多くの外国人受講生を受け入れてきた。しかし受講生の受け入れだけでなく、国際的に労働問題を扱い、第三世界の労働者教育を援助する機関が1976年に設置され、注目を集めている。労働組合国際研究グループ(The Trade Union International Research and Educational Group, 以下TUIREGとする)である。TUIREGは失業と移民労働者の流入が問題となってくる中で、「労働者に影響を与える国際問題の教育・研究を促進することを目的として」<sup>22)</sup>、設置された。その主な事業は労働者教育のための視聴覚教材やパンフレットを作ることであり、様々なプログラムを実施することである。例えば、1989/90年度には以下の様なプログラムが実施された。<sup>23)</sup>

#### (海外プログラム)

- ・トリニダードトバゴ--上級養成コース(Advanced Training Course)、カリブ海諸島の労働組合活動家を対象とし、国際経済を重点的に学習するコース。
- ・シェラレオネ--公務員労働組合との教育プログラム。
- ・ジンバブエ--ジンバブエ及びシェラレオネの労働組合との共同で教育評価・調査活動
- ・エジプト--カイロ労働者大学(Workers' University)の開講

#### (国内プログラム)

- ・ラスキンカレッジ在学中の南アフリカ人のための7週の集中コース--計算(numeracy)、識字、コミュニケーション、研究・教育方法。
- ・ガーナ、ケニア、ザンビア、ウガンダ、タンザニアからの受講生向けのコミュニケーションのコース--視聴覚教育のテクニックに重点。
- ・労働組合員のための1年間のコース--テーマは「環境と開発」。
- ・IRENE(International Restructuring Education Network Europe)との共同での移民労働者問題についての1992年のヨーロッパセミナー。

プログラムの対象がほとんどアフリカ諸国であるように、TUIREGで作成される教材の主要なテーマは南北問題であり、女性労働者問題であり、失業と移

民労働者問題である。例えば、『失業』というスライド・シリーズは、「まず現在の失業の原因の分析、次に先進国と途上国との失業の違い、黒人が入って来て職を奪うといった人種差別的な見方、さらにニュー・テクノロジーの影響、労組が要求している保護主義の是非などをテーマに南北問題を」<sup>24)</sup> 考えるための教材である。学位コースにおいても、アフリカ諸国からの受講生が70年代から増加し、80年代には開発教育のコースも設置された。TU I R E Gのレザー教授が「TU I R E Gは労組に開発教育をするための初めてのNGOだ」<sup>25)</sup> と述べているように、開発教育はラスキンカレッジの重要な柱の一つとなりつつある。

## 2) ラスキカレッジの意義と課題——おわりに

ジョン・フィールドはレジデンシャルカレッジに対しなされている批判及びレジデンシャルカレッジが抱える問題点として以下の5点をあげている。<sup>26)</sup> ①レジデンシャルカレッジは保守党の公教育サービスに対する攻撃が最も焦点としているエデュケイションリベラリズムの象徴であること。②レジデンシャルカレッジは他の継続教育に比べ経費がかかりすぎること。③公的事業への労働者の参加の衰退、製造業の崩壊と共に、労働者の組織と公的部門の結束が弱まる中で、労働者の組織がレジデンシャルカレッジに教育的リーダーの養成を求めなくなったこと。④雇用の停滞の中でレジデンシャルカレッジのスタッフの移動が少なく高齢化が進み、受講生が生活する実社会の変化とレジデンシャルカレッジの教育内容とが乖離してきていること。⑤レジデンシャルカレッジの財源がDESに過度に依存していること。

確かにラスキンカレッジの財政はレジデンシャルカレッジの中でもDESに最も大きく依存しており、現在の「教育改革」が継続する限りにおいては、その財政的破綻は時間の問題である。このような状況の下で、ラスキンカレッジは労働者のためのカレッジではなくオックスフォード大学の中の一カレッジとなるか、職業教育機関となるしかないと、言われている。

しかし、ラスキンカレッジの93年の歴史は、カレッジがイギリスの労働者の要求に応える教育機関であったことを明らかにしているであろう。かつて公的援助を受け入れることは支配階級のイデオロギーを受け入れることであると批判した

プレップリーグやNCLCは1929年には廃校となり、労働組合に吸収されることとなった。トム・ラヴェットは「NCLCは革命的な教育運動であったが、その教育方法・技術においては極めて保守的であった」<sup>27)</sup>と指摘している。一方、ラスキンカレッジは労働者に高等教育を着実に提供し続けてきたのである。また、受講生の多くが大学に進学する中でラスキンカレッジは大学の準備教育機関に過ぎないと批判されることもあるが、最低限の教育経験しか持たずほとんど公的資格を持たない労働者がラスキンカレッジで学び、学習と自己への信頼を取り戻し、大学に進学し、その後、労働組合や地域の活動に帰っていくという点で、単なる準備教育機関とは違った労働者のカレッジとしての意義をもつものである。

さらに、現在のラスキンカレッジを特徴づけるコース・事業は、労働学の学位コース、ASS、TU IREGなどである。つまり、①労働学のコースにおける労働問題への総合的アプローチ、②ASSにおける一般教育と職業教育の統一、③TU IREGなどにおける開発教育の展開、などが今日のラスキンカレッジの意義を示すものであろう。

これらの特徴を堅持しつつ、財政を確保していくことがラスキンカレッジの当面の課題である。レジデンシャルカレッジのほとんどはラスキンカレッジと同様にDESの補助金に依存しており、財政的危機に直面している。しかし、協同組合カレッジは独自の財源を持ち、また最も新しく創立されたノーザンカレッジは長期のレジデンシャルカレッジとしてだけでなく、地域成人の教育要求に応える中で4自治体のLEAの補助金を得ている。また、現在の成人継続教育政策においてさえ、女性、民族マイノリティ、失業者を対象とした教育プログラムは注目を集めている。教育的不利益層を対象とした成人継続教育は今日でも、いや今日こそ必要とされるものであり、ここに英国成人教育の伝統と現代成人教育の課題との統一・発展の可能性が内在するのではないだろうか。本小論ではこうした点を十分に明らかにすることはできなかったが、今後もラスキンカレッジを始めとするレジデンシャルカレッジ、大学成人継続教育等の分析を通して、現代英国成人継続教育に内包する問題構造を明らかにし、その発展方向を追及して生きたい。

## 註

- 1) 1988年の教育改革法及びその後の成人継続教育政策の特質については、姉崎洋一、左口眞明、田村佳子「イギリス成人教育の新しい可能性—パイオニアワーク (PW) を中心に」(広島大学平和科学センター「広島平和科学」14)の姉崎担当部分に述べられている。
- 2) Tom Lovett, "Introduction", Tom Lovett ed., *Radical Approaches to Adult Education: A Reader*. (Routledge, 1988) p. 13.
- 3) 日本社会教育学会第39回研究大会 (1992年10月) での共同研究発表の題目は「イギリス成人教育の新しい可能性 (その3) レジデンシャルカレッジを中心に」。姉崎洋一がノーザンカレッジ、左口眞明が協同組合カレッジ、田村佳子がラスキンカレッジを担当、報告した。
- 4) Harold Pollins, *The History of Ruskin College*, (Ruskin College; Oxford, 1984), p. 9.
- 5) エンゲルス「『イギリスにおける労働者階級の状態』イギリス版(1892年)への序文」, 『マルクスエンゲルス全集』22巻, 大月書店, 1971年, 284頁。
- 6) Harold Pollins, *op. cit.*, p. 10.
- 7) Tom Lovett, *op. cit.*, p. 20.
- 8) Harold Pollins, *op. cit.*, p. 19.
- 9) *Ibid.*, p. 42.
- 10) *Ibid.*, pp.33-34.
- 11) Alfred Plummer, "Residential Colleges in Adult Education", *The Journal of Adult Education*(Vol. 5 No. 4, Apr. 1932) p. 27.
- 12) Harold Pollins, *op. cit.*, p. 43.
- 13) H. D. Hughes, "The Long-Term Residential Colleges and the LEAs" *The Journal of Adult Education*(No. 24, Feb. 1951) p. 146.
- 14) Harold Pollins, *op. cit.*, p. 43.
- 15) 柳父立一「英国の高等教育における社会人学生の概要」(研究代表者: 笠原克博「社会人学生に関する実態調査と今後の施策に関する研究」1992年) によれば, 通常, Diploma は2年間のフルタイムのコースで取得できるものであり, 準学士のレベルに該当する。
- 16) Ruskin College, Report and Accounts for the Year Ended 31 July 1990, pp. 10-13.
- 17) Ruskin College, Prospectus 1991/92, p. 5.
- 18) 柳父立一「前掲」によれば, Aレベル, Oレベルとは, G C E (General Certificate of Education) によって教育程度と学力について認定される Advances level と Ordinary level の資格であり, この資格試験に合格しなければ, 義務教育を終了しても何の資格をもたないことになる。通常, 2科目以上のAレベルがあれば大学への入学資格があるものとされる。
- 19) Richard Bryant and Michael Noble, *Reflections on Social Work Education--A Survey of Former Ruskin Students 1979-1984*, (Ruskin College, 1988), p. 11.
- 20) *Ibid.*, pp. 15-16.
- 21) Ruskin College, *Report and Accounts for the Year Ended 31 July 1990*, p. 9.
- 22) Harold Pollins, *op.cit.*, p.59.



- 23) Ruskin College, *Report and Accounts for the Year Ended 31 July 1990*, pp.12-13.
- 24) 松井やより, 「市民と援助」, 岩波新書, 1990年, 92頁。
- 25) 前掲書, 91頁。
- 26) John Field, "What Future for the Residential Colleges?", *Industrial Tutor* (vol. 4 No. 6, Autumn 1987), pp. 23-25
- 27) Tom Lovett, *op.cit.*, p.20.